

目的 三河湾の離島、即ち日間賀島・篠島・佐久島は本土から比較的近距离であるとはいえ、海にとり巻かれている事、本土から隔絶している事、土地が狭い事等、厳しい自然条件の中で、離島特有の生活文化が育まれてきた。今回はこの島々で漁業を、なりわいとしてきた人々の仕事着について調査し、併せて先年調査した北設楽地方の山間部との比較も行い、特徴を見出す事を目的とした。

方法 調査期間 昭和59年4月～62年1月 調査地域 日間賀島、篠島、佐久島、伊勢志摩 調査方法 現地の郷土史研究家、古老を訪問し、男女の漁業着・作業の内容について聞きとり、写真撮影を行う。また、各地域の郷土資料館等の資料を収集する。

結果 漁業における、戦前までに着用された男の仕事着の上半衣には、長着、どんざ(尻切り半天)、シャツ、下半衣には股引きがみられ、重ね着として“はんこ”がある。しかし、当時は布が貴重であつた為、季節を問わず禪姿で、時には禪すらも勿体ないと素裸で作業する事が多かつた。次に、補助衣には手ぬぐい、菅笠、大正時代には“どかん”が考案され、帽子、ほうかぶり、首巻き、マスク等の機能を一つで代用した。長方形の櫓手袋は船をこぐ時に用いられ、外被類は明治に入り、古来からのみのの他に長どんざが使用された。昭和初期には帆布に漁油を塗ったシャツ型合羽が出現した。現代では伸縮自在のトレーニングウェアが生活着、仕事着として幅広く活用され、衣生活においては農山漁村、都市との差は殆どみられない。以上の事から、戦前における仕事着の着装方法、補助衣、外被類において、生活基盤の違いによる、海村と山間部との間に著しい差が認められた。